

県内花き経営事例

小ギクの周年栽培を主軸にした経営

和歌山県経営支援課

主任 山本香珠代

今回は、日高地域で小ギクを主軸に労力分散と省力化で安定的な複合経営に取り組んでいる事例を紹介します。

経営概要

Aさん宅では、小ギクに水稻、ウスイエンドウ、ハナムギを組み合わせた複合経営を行っています。

労働力は経営主夫婦とその父母の4人でしたが、父母が高齢のため、1年ほど前から小ギクの収穫繁忙期（盆や彼岸）には3～4名を臨時雇用しています。

○栽培品目と面積

小ギク 62a（うち、施設12a）

ウスイエンドウ 5a

水稻 130a

ハナムギ 30a



小ギクの周年栽培と機械化導入

約50年前、水稻とタバコ栽培の農閑期を狙って寒小ギク栽培を始めました。その後、タバコ生産の契約終了に伴い、小ギクの栽培面積を拡大しました。

小ギク導入時から日長反応性や開花時期ごとに品種試作を繰り返し、地域に適した品種と作型を採用してきました。また、平成21年には施設12aを新たに導入し、作型の幅が広がり、安定した周年栽培が可能となりました。現在は需要期に合わせ、栽培面積を調整しながら5月から翌年2月まで計画的に出荷をしています。

また、面積拡大に伴い、平成16年にうね立て整形機（畝たて、施肥、マルチを同時に行う）を導入しました。結果、作業時間が約1/2に短縮され、省力化と作業の効率化が図られています。

さらなる経営の安定化

収益の確保と経営の安定化を考慮し、平成28年からウスイエンドウ栽培（秋まき春どり）にも取り組んでいます。収穫が5月連休ごろで終わるため、小ギクと農繁期が重ならず、家族労働力で経営が成り立っています。

また、ハナムギは、水稻の後作に栽培し、切り花として出荷する他、すき込みにより、土づくりに活かしています。



おわりに

Aさんの小ギクは、品質が高く、消費者から好評です。圃場を訪れても、いつも生育揃いがよく、栽培管理が行き届いていることがよくわかります。種苗会社に毎年出

向く等、熱心に品種や栽培技術を研究され、常に努力と工夫を重ねられてきた、Aさんの農業経営への姿勢がよく表れています。

土地利用体系

